

春の訪れが感じられる今日の良き日、令和七年度東京都立小金井北高等学校第四十四回卒業証書授与式を挙げるにあたり、ご多用中の中、御来賓の皆様にご臨席を賜りまして、本校教職員を代表し、心より御礼申し上げます。

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。ただ今、228名の皆さんに卒業証書を授与いたしました。3年前の春、今、皆さんの周りにいる仲間とともに、この体育館で入学式を迎えた日から、1000日にわたる学校生活を終えようとしています。日々の授業、体育大会に合唱コンクール、桜樹祭、そして修学旅行や部活動・・・3年間にわたる日々が終わりを迎える今日、今この瞬間の自分の姿を、入学した日の皆さん自身は予想をしていたでしょうか。

高校卒業と言う晴れがましい日の直前には、この中のほとんどの人が進路選択や大学受験という関門を経験しました。その結果は、皆さんの胸の中にまだ大きな記憶として残っていると思います。その中には自分が希望していた進路を実現させた人も多いと思います。頑張ったことが結果として報われたことは、成功体験としてこれから先の人生の自信につながるものです。自分の努力は自分が一番わかっているはずですから、是非自信をもって自分をほめてあげてほしいと思います。そしてこの成功体験は、次に何かに挑戦するときにも自分の背中を押してくれる記憶として皆さんの力となってくれると思います。

さて、今日の私の式辞は、そのような輝かしい門出とはならなかった私自身の話です。

私は高校卒業後、4年制の大学に進学しようと思っていました。その当時は、現在の大学入学共通テストと呼ばれる全国一斉のテストは共通一次試験と呼ばれていました。受験のとき、私が指定された共通一次試験の会場は東京大学本郷キャンパスでした。初めて入った東大本郷キャンパスは、日本の最高学府の頂点ともいべき場所にふさわしい威厳と風格に満ちたところで、この場所で夏目漱石や芥川龍之介も勉強したのか、と感激した記憶があります。しかし、それは、自分の現実とは何ら関係のない場所でもありました。私は試験会場こそ東京大学でしたが、実際に進学した大学は、まったく自分が希望していなかったいわゆる「滑り止め」として出願した大学でした。希望した大学には合格できず、合格できた唯一の大学が、その大学だったのです。しかも私は心理学を専攻したかったにも関わらず、唯一合格した大学の専攻は英語系の学科でした。行きたくない大学の、目指してもいなかった学科に進むという最悪の展開が、自分の身に起きるとは思ってもみませんでした。

私は幼いころから、多くの大人に囲まれて育ったため、自分は他の人とは違う特別な存在なのだ、と勝手に考えていました。これは、多くの大人たちから大切にされて育った、いわば幸せの証だったのでありますが、この幻想が大学受験の失敗によって崩れ去りました。特別な存在だったはずの自分は、どこにでもいる「ただの人」だった、という厳しい現実を心の底から思い知らされた、これが大学の入学式の日、その大学の校歌を聞いていた時に私の心によぎった思いです。

最初につまずいた大学生活は、悪いことばかりではなく、今でも付き合いが続く仲の良い友人ができたり、その大学に行ったことで学ぶことができた学問領域に出会ったりもしましたが、私は自分の大学4年間で「喪失の4年間」という自虐的な呼び名をつけていたほどです。そして「ただの人」となった自信喪失の根底には、合格するにふさわしいレベルまで勉強を積み上げなかった自分への怒り、受験会場で力を出し切れなかった

自分への怒り、さらに付け加えると、大学入試の合否結果、という自分以外に責任の矛先を向けることができない自分そのものへの怒りが流れ続けていました。

その後、大学を卒業して、学校の教員になることができました。夢中で仕事を覚えていく期間は、喪失の4年間という大学時代を振り返ることもなく月日が過ぎていきましたが、やがて進学指導に関わるようになって、大学受験というものに再び関わることになりました。自分が教えた生徒たちが自分には手が届かなかった大学を志望し、その生徒を合格に導くためにアドバイスをしたり、指導したりするのは不思議な感覚でしたが、同時に、数年ぶりに大学受験と再会したときに、あの10代最後の自分の心の底に燃えていた怒りの炎がまったく消えていなかったことに気づかされたのです。

怒りの正体に気づいた私は、受験生の時のような失敗は二度としない、今度こそは合格するぞ、と心に誓いました。とは言っても自分が受験するわけではないので、目の前の生徒が少しでも合格に近づけるよう、受験で後悔を残さないように勉強に取り組ませよう、という意識をもって進学指導にあたりました。その結果、生徒が自分には果たせなかった合格の報告に来てくれたときは、自分のこととして喜ぶことができました。一方で、残念ながら自分と同じように受験がうまくいかなかった生徒とは、その悲しみは自分の悲しみとして、職員室の私の席に来て泣いている生徒にかける言葉が見つからずにいたこともありました。

クラス担任として生徒と進路についての面談をしたときに、自分の勉強計画や、取り組み状況を的確に自分の言葉で私に説明してくれた生徒もいました。心の中では「こんなふうに計画をたてて勉強に取り組んでいれば、自分も合格できたかもしれないな」と思い、教員と生徒という上下の立場であったはずなのに、この生徒には勝てないな、と正直に自分の負けを認める場面も経験しました。

目の前の生徒の日々がより良いものになるよう生徒の背中を押したり、うまくいかなかった生徒には同じ側で寄り添ったりすることや、自分の立場や体面を忘れて生徒の能力を無限に引き上げること、これらは教員に必要とされる理想の資質だと言えます。私が、不十分とは言え、多少は生徒と琴線に触れるような、このような関係性を作り上げられたのは、喪失の4年間で味わった挫折と私の心に燃え続けていた怒りがあったからです。あの挫折のときに自分が特別な人ではなく、ただの人だったことを知り、自分への怒りを忘れずにいたことが、全力で受験指導にあたる、合格した生徒も不合格だった生徒も分け隔てなく支える、というように、その後の仕事に少し役立つことになったことは驚きです。しかも、それに気づかせてくれたのが、自分の挫折の原因となった大学受験というものだったのは、皮肉なのか、一つの縁なのかは私にはわかりません。

皆さんは、2年生の英語コミュニケーションの授業で、Apple社の共同創業者であるスティーブジョブズがスタンフォード大学の卒業式で行ったスピーチの英文を読んだことを覚えているでしょうか。”Stay Hungry, Stay Foolish”というタイトルがつけられた彼のスピーチの中に、”connecting the dots”という言葉が出てきます。過去の無関係に見える経験となる点、dotが、将来どこかでconnect、つまり結びついて、大きな成果や意味を持つというものです。だから今その価値が分からないものでも大切にしよう、というメッセージです。

私の大学受験での失敗体験は、私にとってのdotとして、その後の教員人生に結びつい

て生かされた、と言えるかもしれません。しかし、この dot に出会った瞬間だけでは、それが将来どのように結びついてくるかは分からないものです。振り返ったときにはじめて気づくことになりました。

皆さんに知っておいてほしいことは、目の前に起こる dot が皆さんの将来に線となつてつながってくるのか、dot のままで終わるのかは自分次第だ、ということです。目の前に起きた dot はそれが無意味に思えても、つらいものであっても精いっぱいを受けとめ、泣いたり笑ったりしながら、いつも本気で向き合っているといつか何かに結びついてくるかもしれないことを覚えておくとよいかもしれません。

今日の私の話は受験がうまくいかなかった人たちを意識した話なのかと思っている人もいるかもしれませんが、大学入試で栄冠を勝ち取った人は言うまでもなく、大学以外も含めた自分の希望していた進路実現を果たした人にとっても、合格発表や次のステージに進めた経験は一つの点であることには変わりありません。まさか大学に合格しただけで、人生の勝者になれるはずでもなく、ほしいものがすべて手に入るようになったわけでもありません。冒頭に述べたとおり、努力が報われたことは自分のものとして、そしてその経験をこれからの人生にも生かして行けるよう自分を鍛えていってほしいと願っています。

この春に皆さんの目の前に訪れた dot が満面の笑みをもたらすものだったとしても、止まらない涙をもたらすものであったとしても、皆さんの将来に、線となつて結ばれて、大きな力をもったものになって帰ってくることを私は願っています。

繰り返しになりますが、点を結び付けて線を描くのは自分次第です。目の前に起こった点に本気で向き合い、自分だけの人生を引き寄せてください。

最後になりましたが、保護者の皆様、生徒たちの 1000 日にわたる高校生活が終わり、皆様にお返りする日となりました。皆様のご期待に沿えないことも多々あったかと思いますが、晴れの舞台に免じてご容赦いただければ、と存じます。私は、本校に見学に来る中学生とその保護者から、小金井北高校の良いところは何ですか？と聞かれるたびに、本校の生徒です。どこに出しても自慢できます、と答えています。ここにいる 44 期の卒業生もまさに自慢できる生徒だったのではないのでしょうか。幼いころから大切に育てられてきたことがよくわかる「育ちの良い」生徒たちだったと思います。その陰には皆様のたゆまぬご苦労があったと推察しますが、まずは本日、ここまでたどり着きました。長かった子育てもゴールが見えてきたかと思えます。お子様のご卒業、誠におめでとうございます。

本日卒業を迎えた生徒の皆さん一人一人が、この先も自分らしく、幸せで、実りある人生を歩まれることを祈りつつ、私の式辞といたします。

令和 8 年 3 月 14 日

東京都立小金井北高等学校長 石田 健司